

理論物理学での波の関数4

——距離および時間の仮定できない領域ならびに基礎物理学での距離および時間について——

A LIFE COM. バイオ研究室

富岡和人

1 まえがき

どのように正弦波を定義するかについて文献1および文献2で論じてきた。その正弦波を記述する際に使用する正円の円周上の点の等速の回転を応用することで、時間の定義ができることを文献3で論じた。この著者が独自に定義した時間では、2012年現在では慣性座標系を使用して説明した。このことは、2013年現在でも変更せずに、さらに発展させることで距離および時間の存在する領域および距離および時間を仮定できない領域について2章で考察している。著者の時間の定義を応用することで、心が無始無終で存在することを2012年現在の文献3で仮定できた。時間および距離を仮定できない心では、この無始無終を仮定した。この意味では、距離および時間を仮定できない領域を考えていることになる。このことは、物理学での時空に心が関係することを知る論説を得ることになる。この論説で、時空とも考えられる時間および距離が存在する空間が生じることについて考えた。

2章は理論物理学での議論である。一般の理論物理学では、時間および空間の存在することを仮定している。宇宙の始まりについての議論では、我々の知る物理学の法則が成立する宇宙がいつ生じたものかを考えることが有るようである。このような考え方だと、宇宙が生じる前には宇宙の無い所を仮定しているようである。このような議論で宇宙の無い所がどのような所として論説が有るのかを著者は知らない。一方、著者は心に時点、距離およびエネルギーの存在しないものと仮定することで物理学の宇宙とは異なる領域を考えた。物理学の座標系には、著者が定義した質点の速度を使用して時点、距離およびエネルギーを具えるものと仮定した。物理学で与えた時間、距離およびエネルギーが、それらのない領域とどのように関係を説明できるものか？このことで、時間および距離が重要となった。また、時間、距離およびエネルギーのない領域と心との区別を与えられるものか問題を見ることができた。この問題では、3章の考察で使用する‘妙な法’で考えた。

著者が時間の定義から導出して仮定した心の無始無終を応用して、著者の独自の心のモデルを言葉で構築していることを文献3で説明した。3章では、日月の徳について考えながら時間および生死について考えていき、心を著者の心のモデルでどのように考えることができるものか説明した。心のモデルでは、相、性および体で心をも含めて現象を記述した。物理学ではエネルギーの保存則を経験的に認めている。このエネルギーが時間および距離に強く関係を持つことに対して、時間および距離を仮定しない心の性をモデルで3章1節に考察している。3章2節では、日のエネルギーが我々の身心にどのように関わるかを考えた。エネルギーおよび心をも統べる法がひとつであることを文献3で説明した。その法を妙な法であるものと考え、3章3節で妙法と呼ぶことにした。文献3で相、性、体、力、作、因、縁、果および報で説明した。このことで、究竟して大本に結ばれることを3章4節で考察している。この考察で、著者の心のモデルでの相とは何を意味するのかを説明した。ここで、智がどのように心に働くものかについて考えた。著者のモデルでの妙法に収められている主の徳、師の徳および親の徳を3章5節で説明した。縁で他の心に結ばれていることを考察する際に、これらの徳が相、性および体で説明できる。3章6節では、心が著者のモデルでは相に具することを説明する。

3章は工学のモデルでの議論である。物理学の法則が使用できない領域で、どのように法則とも言えるものを解明するかを問題とする。心に時間、距離およびエネルギーを仮定できないことで、著者は工学での言葉でのモデルを構築することを試みた。工学の言葉で記述するモデルから物理学的モデルあるいは数学的モデルには結び付けることができれば数学および物理学で記述することを可能とする。2012年現在の文献3で構築した心のモデルをさらに発展させたものを本書

の3章で考察した。約1年間が経過したことで、唯一の法となるものについて具体的な解釈を与えることができた。ここでの解釈は多くの仮定を使用して与えているもので、将来に修正する可能性も2013年現在の著者は考える。物理学で記述できるようになると装置を考えやすくなる。2013年現在の言葉で記述するモデルは術としての性質を強く示すものであると著者は考えている。この研究は、心の解明だけでなく時間、距離およびエネルギーが存在しない領域と物理学の研究領域を統べ合わせる研究でもあるものと著者は考えている。このことから2章の議論は3章の考察に非常に重要な議論である。

文献1から文献3は理論物理学での波の関数について説明したものである。本書の第3回までのものであり、本書は第4回目のものである。著者は正弦波を専門書でたびたび読むが、その定義を教えられた記憶がない。文献1および文献2では、著者が独自に正弦波の定義を試みたものである。正弦波を記述する際に時点および距離を使用する。この時点および距離について物理学でどのように解釈すべきかを文献3で考察した。その考察で著者が独自に時間の定義をした。2013年現在まで物理学および工学を学んできて時間の定義を教えられた記憶がない。SIでは測定する際に時間の値の定義は教えてくれる。しかし、物理量としての時間の意味の定義ではない。測定値の定義は測定器の性能を評価するのに使用するので工業製品でもたびたび使用するものらしい。物理量としての時間は、そのような定義が無くても直感的に専門書を読める。このことで、物理量としての時間の意味の定義を教えないで済ますことができるようである。著者の2012年現在の時間の定義は、ニュートン理論でも特殊相対性理論でも使用できるものと2013年現在の著者は考えている。

文献4はアインシュタインの特殊相対性理論で速度の変換の式を導出している。著者の物理学で独自に定義した質点の速度を説明している。この質点の速度の定義を使用して2章で議論している。著者が学生の頃の日本国内の物理学書および数学の微分での応用の速度の説明では、点を使用して質点の速度を定義しているものと言えるものが有った。また、質点の速度の定義すら教えない指導を専門書で展開するとも言えるものか？そのような物理学の指導は大学の専門教育として酷過ぎるものと、著者は考えている2013年現在である。この問題では、著者は質点を使用して定義した。このことが、非常に強かに顕われてくることを本書の2章の考察で示したつもりである。2013年現在の日本国内での物理学の質点の速度の定義が、どのようになっているかは知らない。完全に改善されたことも確認した覚えはない。

文献5では電位の定義についてのファイルであり、その第1回目である。ここで、ポテンシャルエネルギーを著者自身で質点系を使用して定義した。著者が学生であったときの日本国内でのポテンシャルエネルギーの無思慮——質点でポテンシャルエネルギーを教えていた。——な説明とは異なる。2013年現在の理論物理学の教育でも優等であるものと著者は考えている。エネルギーの保存則についても説明している。特に、質点系のエネルギーの保存則は著者が学生の頃の理論物理学の専門書にはなかった記憶がある。質点系のエネルギーの保存則は理論物理学で重要であり、経験的に著者は非常に使うものである。電位の定義は著者の知る専門書の説明は不適切なものばかりとも感想を持つことが有るほど酷いものであった記憶がある。著者が独自に改善をした電位の定義を説明するのに準備した第1回目である。

文献6ではアインシュタインの特殊相対性理論でエネルギーの変換および相対論的質量の変換の式を導出している。質量について考察している。そして、著者が独自に定義した静止質量を説明している。さらに、慣性座標系での時計について考察している。この時計については本書にも関係がある。

文献7では著者が微分積分学を学んだ。文献8では基礎物理学を学んだ。文献8の基礎物理学を直接使うものではなく、著者が上述のように独自に定義したものを著者は使用することが有る。

文献9および文献10は、論文であり著者の修士論文の研究を修了後に進めたものである。心臓血管系の回路モデルで分母がゼロになる問題を著者は学生の頃に見つけた。また、生理学に一致しないモデルでもあった記憶もある。そのように不適切なモデルに対して著者の独自の理論——公式も著者が独自に定義した。——のモデルを修士論文で提出した。その著者の独自の心臓血管系の回路モデルをさらに改善したものを文献9は説明した論文である。著者が学生の頃に大学の

理工学部の図書館で見た生理学の血流量の定義は道理に外れた嘘であった。著者は独自に血流量を定義した。この血流量の定義を、説明した論文が文献10である。

文献11から文献13は著者の心臓血管系の回路モデルについて初心者向けに説明したファイルである。文献9および文献10での初等的な——基礎的でもある。——部分の説明をしている。

文献14から文献18は上述の電位の定義についての説明のためのファイルである。文献5の後に続くものである。

文献19では著者がアインシュタインの特殊相対性理論を学んだ。本書では一般相対性理論について参考をしている。

本書では‘誤り’がないことを保証はしない。本書の校正の作業は今後も行う予定である。本書の‘誤り’が見つかった際には不定期に改訂を行い発行する予定である。

目次

1 まえがき	1
目次	4
2 正弦波 (sinusoidal wave) の記述で用いる距離および時間について ^{1), 2), 3), 4), 5), 6)}	5
2.1 距離が生じるか? ^{3), 4), 5), 6)}	5
2.2 慣性座標系およびエネルギーの関係 ^{4), 5), 6)}	6
2.3 座標系となるエネルギーを得る力 ^{3), 4), 5), 6)}	7
2.4 エネルギー, 距離および時間のない領域 ⁶⁾	8
2.5 エネルギー, 距離および時間が存在する領域ならびエネルギー, 距離および時間のない領域 ^{3), 5)}	9
3 日月の力から起滅する1日の相で観察する心のモデルの時間について ^{3), 5)}	10
3.1 エネルギーの保存則および心の性 ⁵⁾	10
3.2 日のエネルギー	11
3.3 妙なる法	12
3.4 相	14
3.5 主の徳, 師の徳および親の徳	15
3.6 本身相に具する心	16
4 あとがき	17
参考文献	17
免責事項	18
著作権	18

2 正弦波 (sinusoidal wave) の記述で用いる距離および時間について^{1), 2), 3), 4), 5), 6)}

日が天に存在することで、我々は光を得る。太陽は、眼界に及ぶ世に日のエネルギーを与えている。日輪が東から昇り西に沈むことで昼を知り、日輪が没していることで夜を知る。昼夜で1日を知る。この日輪の運動では、天に移動した距離を考えることができる。日輪の移動する速さを観測することで、眼界に時刻を表す時計を得る。夜に月の光が在るのは日の光が月にあたることに観測する現象である。闇で眼界から消える文字が智慧の光を心に照らしていたものとも考えることもできる。日の光で眼界を開き文字を得て心に智慧の光を照らすことを説明できる。智慧の光は育まれた心から生じ乱れず善の世界に住し心の埃^{ほこり}を智慧の光で生じる風で払い心を清めるもの、と考えることもできるだろう。日の光では、気温の変化が生じて風が起きる。温度の変化および風でエネルギーの分布が変化する。

日のエネルギーでは、熱も地球上の物質の存在を物理学で説明する現象である。物理学では、太陽を中心に認め太陽の周りを回転する地球を説明している。この太陽での太陽系を認め、太陽の質量での重力のエネルギーに太陽系を構成しているエネルギーであることを2013年現在の物理学では認める。太陽系での天体の質量で重力の場のエネルギーを宇宙空間に認めることができる。原子の構成では、電磁気力、強い力および弱い力が説明されている。これらの力が作用して構成される原子内の粒子の運動では粒子の質量での重力を説明できる。これらの力の場を仮定して、場のエネルギーを仮定できる。このように、空間にエネルギーが存在することが説明でき、空間には距離を考え時間を用いて物理学の理論を記述する。

著者の時間の定義³⁾では、時間および距離が共に存在することを仮定している。正円の円周上等速で回転する点を仮定する。この等速の回転を絶えず行うことを時計に求める。日輪の周期運動は、その回転運動を正確にはできない。原子のエネルギー放射の周期のほうが太陽の周りを回転する地球の回転運動の周期よりも著者の時間の定義に近い観測ができるようである。

著者の正弦波の定義²⁾で使用する正円の円周は慣性座標系⁴⁾の距離であり、その慣性座標系で使用する時点であることを説明した。上述では、エネルギー、距離および時間が同時に存在している。時間の存在を考えるのに、距離およびエネルギーも共に考えることになる。このことについて、2章で考察していく。

2.1 距離が生じるか?^{3), 4), 5), 6)}

如何なる法^{ほう}から距離が生じるか? 無始——始まりはなく存在することを意味する。——から距離が存在し空間の存在を仮定すると時間が共に存在することを、著者の定義した時間³⁾では時計に仮定する。この時計は、無始以来等速度運動⁴⁾をしている座標系に存在することになる。この座標系が生じることがなく存在を仮定することは、一切の物理学の力が作用することなく運動をすることを仮定する。この仮定では、エネルギーの分布を変える際の力の作用を否定する。エネルギーが存在することで質量を仮定する際には、質量のために質点を仮定してポテンシャルエネルギー⁵⁾を仮定できる。ポテンシャルエネルギーは質点系を仮定しており、質点系内にエネルギーが保たれていることを仮定している。ひとつの質点がエネルギーを保存していることのみを仮定すると、その質点が如何にして質量を保つことができるのか問題になる。

運動エネルギー^{5), 6)}を持つものと仮定すると、質点が運動している空間を仮定する。このことは、距離を仮定している。距離が存在するならば慣性座標系を仮定できる。著者の時間の定義では、アインシュタインの特殊相対性理論を参考にしていて、ここでの慣性座標系は等速度運動をする3次元の座標系である。ニュートンの理論物理学のように絶対空間は仮定しないで、アインシュタインの特殊相対性論のように各慣性座標系が相対的に等速度で移動しているものと仮定した速度の相対性を考える⁴⁾。加速度の相対性では、慣性座標系内での質点の加速度運動に対する慣性座標系の等速度運動の保証をする。この場合では慣性座標系内で加速度運動する質点から慣性座標系を見ると慣性座標系が加速度運動していることになる。この加速度運動で慣性座標系に力が作用しているものとは扱わない。著者

の定義した時間では、時間を定義するのに使用した慣性座標系内に加速度運動する質点を仮定して、その慣性座標系の等速度運動が保証されなくなる力が作用することはないものと仮定する。ここでの慣性座標系の扱いは考察のためのもので、等速度運動する質点の存在を保証することが議論に使用する仮定である。加速度座標系を使用する計算の場合でも座標上の各点に慣性座標系を仮定して時計を仮定する。その時計は各位置に仮定する。この時計での時間は慣性座標系の時間の変換を仮定するが、実際には使用する物理学の理論で使用する変換式が決定される。

直交座標系に描く正円になる点の軌跡で休止せずに絶えず等速での回転をする点を保証できるもので、著者が定義した時間の時計になるものを選択する。周期を計算するのに、等速の速さおよび円周の長さを知ることが要求される。2013年現在の基礎物理学では、慣性座標系の距離および時点を使用することを著者は仮定している。

2.2 慣性座標系およびエネルギーの関係^{4), 5), 6)}

等速度で運動する質点の存在で各位置に、その質点の運動エネルギーを加えることになる。この加算をしても、その質点には一切の物理学の力が作用していないことを仮定する。このことで、空間のエネルギー分布が変化することになる。空間内にひとつの質点のみでの存在あるいは質点系としての存在であることを問わず、このエネルギー分布の変化は生じる。この仮定でのエネルギーの分布の変化は、エネルギーを持つ他の一切の存在を否定していることを仮定している。

エネルギーを持つ他の一切の存在が否定されることでは、距離を測る物体を仮定できない。距離を測ることができないことでは、その質点と区別するものが空間内に何も存在しないことを仮定できる。移動を仮定しているが、移動を観測できない。移動をしていることを説明できなくなる。これは、等速度運動する空間を記述できないことになる。このことは、仮定に反する。

さらに、無始以来力が作用せずにエネルギー分布が生じるものとする、現在の宇宙空間が保存しているものと仮定するエネルギー量がいつから存在するものか2013年現在の物理学では説明できない。2013年現在の物理学では、宇宙空間内——質点系としても扱える。——にエネルギーの保存則が成立するものと仮定することが一般的であるものと著者は認識している。この保存されているエネルギーが存在することでは、その質点のみがエネルギーを持っているものと仮定することに反する。

空間内に質点系を仮定することでは、エネルギーの分布が変化することで物理学の力の相互作用が生じることを説明できる。この相互作用の影響で、無始以来の等速度運動は不可能になることを仮定できる。始まりを仮定することでは、質点が運動を始める際に、質点あるいは質点系が新たなエネルギー分布を得て運動が生じるものと仮定できる。新たなエネルギー分布を得る際には力が作用するものと仮定できる。質点系を仮定してその質点系が運動を無始以来していることを仮定すると、その質点系をひとつの質量を持つ質点として計算することで既に議論したように仮定に反する。

このことから、最初は静止している状態を仮定してみることになる。静止している物体が運動を始めるには、その物体に力が作用して加速度運動をすることになる。この最初では、物体は一点に静止している。その一点に他の質点の存在を仮定するか、あるいはひとつのエネルギーを保つ存在を仮定することになる。一点にエネルギーを保つことでは、一点には空間を仮定していない。距離および時間を仮定できないことで、2013年現在の日本の大学課程での基礎物理学では、エネルギーを仮定できないものと著者は考える。

無始以来エネルギーが存在する空間を仮定する。この空間内でエネルギーの分布の変化を仮定できる。このエネルギーの分布の変化で力が作用しているものと仮定できる。このことでは、質点の運動を仮定できる。無始以来運動をしている質点が存在することでは、運動をしていることで距離および時間も仮定されている。運動を記述するのに時間および距離を使用する。ただし、すべてが静止し続けることでは時間及び距離を記述できなくなる。このことは、

著者の時間の定義でも明らかである。無始以来運動することで、等速度運動が保たれないで距離が存在しない所を空間の外に仮定できる。時間を仮定できる空間内では、無始以来のエネルギーが保存されている空間である。この空間が、空間の外に拡大することを仮定すると距離および時間が存在しないものと仮定した所に距離および空間が生じることを仮定する。この拡大は、どのように説明できるものかが問題である。物理学では、距離および時間が存在することを仮定して運動を説明している。この拡大では、距離および時間が存在しないところに距離、時間および運動する質点が生じることを説明できる物理学の理論の構築を意味する。また、先に時間及び距離が生じて次に運動する質点が生じるものと仮定しても、この説明のための理論を構築することになる。時間および距離が生じる——創成される。——物理学の理論が実証できるならば、無始以来時間および距離が創成されていないことを仮定する必要も無い。このことで、無始以来の存在として仮定する空間に保たれているエネルギーの保存則には十分な説明がない。

2.3 座標系となるエネルギーを得る力^{3), 4), 5), 6)}

時間および空間が無始以来存在する孤立した領域を仮定して、エネルギーが生じる——創成する——ものと仮定するとエネルギーの保存則⁵⁾に反する。この孤立した領域内での等速度運動では領域の隅で等速度運動を説明できなくなる。そのような領域に隅がないことでは永遠に等速度運動が可能であると、質点内のエネルギーの分布に変化がないことを仮定する。この仮定では、エネルギー保存則を破っているのでエネルギーが創成することになるとエネルギー分布が変化する。このことで、物理学の力の相互作用が生じ等速度運動を保証できないものと考えられる。さらに、エネルギーが創成しても質点内のエネルギー分布の変化が無いことを仮定すると、その孤立した領域内での質点系のエネルギーの保存が保証される領域を仮定することになる。その質点内に力の相互作用が生じないことでは、その質点および質点内に力が作用しないのに質点として存在できることを仮定している。粒子内のエネルギーの分布が均一でも、その粒子内にエネルギーを加えることでエネルギー分布に変化を与えることができる。このエネルギーの変化が生じることで力が生じるものと仮定できる。そのように粒子内にエネルギーを加えることができないものとして仮定をすることで、均一なエネルギー分布を保証する。エネルギー分布に対して質点系が存在しないものと保証することができない。質点系を仮定すると力の相互作用が生じてしまうものと2013年現在の物理学では考えることが一般的である。このことでは、力の相互作用が生じないことに反する。このような空間内に均一なエネルギー分布をする質点系の存在を著者は知らない。ここで仮定した質点で考察するよりも等速度運動を仮定して扱うことのほうが、2013年現在の物理学理論では以下のように説明を与えやすいものと著者は考える。

等速度運動を記述するには、速度を定義⁴⁾する。質点の速度を定義するのに、質点、距離および時間を使用する。質点を定義するのに質量を使用する。この意味では、慣性座標系は質点の質量が存在することで距離および時間を記述するものと仮定できる。質量でエネルギー⁶⁾を仮定できる。エネルギー、距離および時間は共に存在するものと仮定できる者か。この仮定では、距離および時間で時空を仮定するだけでは不十分である。その時空にエネルギーも考えることになる。どのように定義すべきかは2013年現在の著者には明らかにできない。

アインシュタインの特殊相対性論^{4), 6)}の慣性座標系および一般相対性理論の座標系を参考にして次のようなものを著者は考えることもある。慣性座標系を等速度運動するエネルギーを保つ存在であるものと仮定——定義——する。このエネルギーの存在で距離および時間が保証されるものとする³⁾。エネルギーは距離および時間を具えるものと仮定する。加速度運動の相対性では、加速度運動する座標系で他の加速度運動する座標系の加速度運動を記述する。加速度運動の加速度を観測する各座標系での同じ質点の運動で異なる加速度を観測することは明らかである。加速度が異なることで質点の速度が変化することはニュートン力学でも説明できる。質点の速度が異なることで、その質点の全エネルギーが異なることをアインシュタインの特殊相対性理論⁶⁾では説明している。特殊相対性理論でのエネルギーの変換の式を導出できることでも、各慣性座標系間でエネルギーが異なる値で観測されることを説明している。慣

性座標系を仮定することは、加速度座標系上で可能である。このことで、加速度座標系上で質点の等速度を観測することは等速度運動していることを仮定しているものであり、実際は質点が加速度運動しているものと考えられる余地がある。この意味では、座標系となるエネルギーを仮定することは、慣性座標系を仮定して観測したエネルギーでの座標系を考えることになる。加速度運動している質点に、実際の物理学の力が作用しているかは問題である。

加速度座標系のように各位置に慣性座標系を仮定できる場合には、その座標系全体がエネルギーを保つ存在であり距離および時間を具えるものと仮定する。その座標系の各位置に速度を仮定でき、その速度で直線運動する点を仮定できるものとする。その直線運動を仮定している等速の点は、時間を計算する正円の円周上を絶えず等速で回転する点として扱うものとする。各位置での速度が決定するので、その速度での等速度運動する慣性座標系を仮定することでエネルギーをも仮定したことになる。加速度運動は、その加速度で記述する速度³⁾の微分の線形性で等速度運動する慣性座標系を次々に替える運動であるものとする扱ってもできる。

加速度座標系上の各位置に定義した時計の移動速度が変化することを他の座標系では観測できる。各時計の時間の変換は時計の移動速度を使用することを仮定できる。このような類の計算は、特殊相対性理論で導出できる³⁾。この著者の考察では、特殊相対性理論の仮定とは異なるところがある。このことで、特殊相対性理論の計算結果とは異なる箇所も考えることになる。等速度するものは、他の位置の時計との相対的な速度で認めるものとなる。実際には、体積を仮定することになるものと考えられるので、相対的な位置関係を仮定することで距離を仮定することができる。如何なる法を縁として如何なる力が作用して、この座標系となる世界が生じるものか？如何なる因を助ける縁に会い、この世界に成る果および報を得るものか？この座標系となるエネルギーを得る力が、如何なる因および如何なる縁と関係を持つものか考えることになる。

2.4 エネルギー、距離および時間のない領域⁶⁾

このエネルギーが存在する領域に隅があると、等速度運動が永遠には続かない。この領域内のエネルギーが保存されることでは、距離および時間が共に存在することを仮定すると領域が拡大しても距離および時間を保証することになる。この領域が無始以来存在していると、最初の領域を仮定できない。無始以来存在しているので最初の位置になるものが仮定できない。この領域全体でエネルギーを保存するので、特殊相対性理論を使用すると質量⁶⁾を仮定できる。この質量の質点には、移動を観測する他の物質を仮定できないと移動の保証を与えることができない。もし、移動を確認できる物質を仮定できると、その領域内だけにエネルギーが存在する仮定に反する。その領域内にはエネルギーが存在するので、距離および時間を仮定できる。その領域内で、その領域の長さを測ることも理論上できる。この領域が拡大する一方である場合は、距離が消滅する時点も仮定できることが無始以来から存在することに矛盾する。この仮定した時点では、エネルギー、距離および時間が同時に消滅するものと仮定から考えることができる。無始以来の領域の存在が否定される議論であるものと扱える。

一方、この領域が拡大したり縮小したりするならば無始以来の領域の存在を仮定できる。このことでは、エネルギーの保存則を保証する仮定での孤立した領域であるので、その領域外で方位が定まらなると領域内での相対的な位置関係で領域の形を記述することになる。方位が定まらないことで領域の形の変化によって領域内での相対的な位置関係が変化することが有る。この履歴で領域外に距離を仮定できると、その領域外に距離および時間が無いことを仮定したことに反する。領域内の方位が定まることでは、領域外での方位の問題がある。方位は位置を定め、その位置から方位を定義する。位置が仮定できない領域外では方位を定義できない。直線を領域内から仮定できなく、領域内に仮定する線分に限ることで領域外に距離を仮定できない。領域外の距離も時間もエネルギーもない領域の中に、他のエネルギー、距離および時間が存在する領域が存在する保証はない。そのようにエネルギーもない領域の中に、エネルギーのある領域が複数存在する場合では互いに他の領域に距離を仮定できないことは明らかである。それらのエ

エネルギーのある領域が重なり合い存在することは、2013年現在の物理学では説明するのは難しいものと著者は考える。

2.5 エネルギー、距離および時間が存在する領域ならびエネルギー、距離および時間のない領域^{3), 5)}

2.4 では、2つの領域を仮定して議論した。ひとつは、エネルギー、距離および時間が存在する領域である。もうひとつは、エネルギー、距離および時間のない領域である。もし、この2つの領域が重なることが可能であるならば、各領域は区切りを得て重なるものと仮定できる。距離を仮定していない領域なので、距離がある領域の各位置関係に縁を持つことも仮定できる。この縁から果および報を出来させることを仮定すると、エネルギーがエネルギーのない領域から生じることを否定できない。このことでは、エネルギーの保存則⁵⁾を保証していない。エネルギーが生じることでは、エネルギーが生じた時に最初の時を考えることができる。もし、エネルギー、距離および時間のない領域が2つ以上存在すると、それらの領域は共通に支配をしている法で用いられるものと仮定できる。それらの領域がエネルギー、距離および時間が存在する領域との縁を持つことで、各領域間でのエネルギーの保存則を否定できない。このエネルギーおよびエネルギーのない領域の2つの領域を支配する法が存在するならば、その法でエネルギーの保存の保証については受け用いるものとなる。

その法にエネルギーを得る力が作用する縁を仮定して、その縁で因からエネルギーが生じるものと仮定する。エネルギーが生じることで、エネルギーの保存則が成立する場合と破れる場合を仮定する。エネルギーが存在することでは、距離および時間を仮定している。このエネルギーの世界での物理学の法則を使用する座標系を仮定することになる。この物理学の法則は、エネルギー、距離および時間のない領域が支配されている法——2.5の題目の2つの領域を支配している法のこと。——に含まれてエネルギー、距離および時間が存在する領域を支配することが有るものと仮定する。

著者が構築している言葉での心のモデルでも、心に距離、時間およびエネルギーを認めていないことを2012年現在の文献3で仮定している。このことで、心が無始無終——始まりがなく終わりもないことを意味するものとする。——で存在することを仮定できた。エネルギーで構成されていないものと仮定する心が物質のように分解して心でなくなることを、2013現在の基礎物理学理論では認められないものと著者は扱っている。

3 日月の力から起滅する1日の相で観察する心のモデルの時間について^{3), 5)}

ひとつの心のモデルに、体、性および相を仮定している。相、性および体から力、作、因、縁、果、が生じる。果に報を得る。この報は、その相、性および体で受ける境界を決定するものと仮定する。性が異なることで、異なる相を体から得る。法の体から得る相、性および体を説明する。法の体から得るものを知るのは大本と仮定することでは、大本が本の属性を決定する。その本の性が決定することで、その本の体から出来るものが決定する。この出来るものに、相、性および体を仮定する。性が異なることでは、体及び相が異なることも仮定できる。同じ体でも性が異なることで生じる相が異なることを仮定できる。このことで、報で受ける境界を決定するには性を決定するものと仮定できる。この決定は、報で決定される相、性および体を認めている。報が相、性および体に等しくなるものと解釈できる。このことを究竟すると大本の相、性および体に等しくなることを仮定できる。究竟するまでに、どのような力が作用するものか考える。この相、性、体、力、作、因、縁、果および報についての説明を考える。属性——著者の心のモデルでは性を決めることでは質を意味するので‘ぞくしょう’と呼ぶことをにした。——については、3.4で説明する。

時間で我々の生死を説明できる。この生死は我々の肉体の生死である。著者の心のモデルでは、無始無終の心の存在を仮定しており³⁾、本は常に存在しているものと仮定した。この本は、相、性および体で記述できる。我々の心の相は‘1日’を日月で示す。我々の‘1日’は、日輪あるいは月のみでも観測できることはある。この‘1日’を用いて、昔から我々は1日の時間を知る。日輪を物理学の太陽として扱い、著者の心のモデルでの太陽の力について考え時間についての考察をする。地球上で太陽の力が作用して我々が智慧を得ることを説明する。この智慧が心に関係を持ち、智慧に因り我々の心の境界が決定することについて考察する。本から世界が出来ることを説明して、世界を支配するもの、仕向け従わせるものおよび生むものについて考察する。

3.1 エネルギーの保存則および心の性⁵⁾

日月は天に存在するものと考え。このことでは、天が仮定できることで1日を仮定できるものと考え。天が仮定できることでは一般には距離を仮定できる。距離を仮定できることでは、著者の定義では時間を定義できる。1日は天に日輪が存在することで定義できることを我々は経験している。このことでは、1昼夜を意味する‘日’は‘時間’とは異なるものである。このような意味の太陽として扱うことができる物体は宇宙に多く仮定できる。太陽系の太陽では宇宙に存在する他の系の惑星の1日を定めるのには一般に使用できないことは明らかである。

天の性に距離を仮定できる。日輪の性に移動を仮定することでは速さを仮定することになる。天空での移動で‘速さ’を仮定でき、時間を定義できる。天の性から生じる距離を仮定している空間内に地が生じるものと考え。地に距離を仮定できる。このような考え方では、地が存在するには天が存在することを仮定している。この考察では、天は性を使用して説明されている。著者の心のモデルでは、相および体をも使用して天を説明することを仮定する。この意味では、力、作、因、縁、果で天を説明することにもなる。このモデルでは、天は法に従うものと考え。

物理学で扱う天空——空及び宇宙空間を仮定する。——はエネルギーで構成できるものと仮定する。地を宇宙空間に存在する惑星に仮定することでは、地もエネルギーで構成されるものと仮定できる。地に相対的な距離の観測で、宇宙空間に物質を存在させる空間を仮定する。この仮定で、物理学な場に物質が存在するものと仮定できる。物理学の場に時点および位置を仮定して、距離を計算できる。場の上に物質が存在することでは、場が地の性——徳——を示すものと仮定する。2013年現在の物理学では、場がエネルギーをもつことは仮定できる。物理学の空では空間を考えるが虚空に見える空に視覚で観測できない物質が仮定できることがある。真空を空間内に何も無いものと理論上仮定することがある。この仮定でも、実際の観測で人工的に真空として用意する空間には何等かの物質が存在して

しまうものと2013年現在の物理学では一般に考えるだろう。

一方、2章での著者の領域の考察では、真空中にもエネルギーを仮定することがある。物理学な空は地の性を示す場で生じるものと仮定できるだろう。著者の2012年現在の心のモデルでは、心に距離を仮定していないことで時間をも仮定していない。このことでは、心にエネルギーを仮定できないことになる。この天窓が心と一体で大本および本から生じる現象として説明できるものと、著者のモデルでは仮定する。各本にエネルギーを仮定していない。各本が物理学的な空を生じる性を得ることで、その本から生じる現象としての物理学での空が生じるものと仮定する。このような考え方では、性を得ることで相が生じるものと考えている。本が性を得ることで、その本の体から相が生じているものと仮定する。この性は大本から得たものと仮定する。この解釈では、性で体から生じたことを相で考えることになる。

2013年現在の物理学では、質点系内でのエネルギーの保存⁵⁾を認めている。その物理学理論上、孤立している系内でエネルギーを造る——創成する——ことはなく、また、滅失することはない。系内の特定の対象がエネルギーを保つことは、系内でのエネルギーの配分として考えている。系内のエネルギーが定数でも、系内の特定の対象が保つエネルギーは変化する可能性を認める。このように、エネルギーが分けられていくことで、その分けられるエネルギーを保つ対象は交代することを仮定する。

一方、各本の性は、各本に特定の性のみを決定する規定がそれぞれ割り当てられるものではない。大本と同じ法の体を持ち、各本の縁に助けられ因に因る果で性を大本から与えるものと仮定できる。このように、各本は無性——無仏性を意味するものではない。——とも言えるように各本の性は無始以来決定しているものではない。性が変化することで、本から出来る相は変化することを仮定できる。大本から与えるすべての性を法に収めているものと仮定する。このことでは、無始以来各性は特定の本を持主にすることは決定していない。無始無終で各本の性は、その法に収められている性から大本に与えられて変化することを仮定している。

3.2 日のエネルギー

日月の体を等しい法に仮定する。この法は唯ひとつであるものと説明した。この法の説明する起・減で妙用として説明した。この妙用で生じるものおよび減するものには、この法で説明する因果を仮定する。生に因果が付くものと仮定する。ここで仮定している生・減は生・死の生に仮定する。その生・死の生で生じたものが減することに、時間を仮定する。同様に、減に因果が付くものと仮定する。その減の因果に他の生・減を仮定できるものとする。生・死で太陽の生が生じており、刻々太陽の減を仮定している。この太陽の減を仮定することは、生死の生で生じたものに減を仮定することを意味する。このことは、生・死の生で生じるものには減することを意味する。消えることを減するものと解釈できることがある。

本から出来るものの性に時間を仮定しないで、相に時間を仮定できるものが存在する場合を考える。この考察では、生死を仮定するものに相を仮定する議論になる。この相に、生減を仮定する。太陽に相を観測できる。日輪で‘1日’を観測することも既知である。この相での上述の太陽の生減を考え、時間を仮定できる。太陽の相が生のおよび減の相を示すものとする。相が生から減に変化するものとする。相を観測することで生減を考えることができる。この相の変化で、時間を観測できるものと仮定する。

縁に因り生じた果に伴う太陽の報いは太陽の性に強く制限されるものと考えられることは、我々の日常の太陽に対する観測で著者は考える。時間を観測する相は、この果で生じた相をすべて観測対象にするものではない。この観測対象には、一般には日輪自体の運動を追跡することになる。東から西へ日輪が移動することで、1日を知る際に朝から夜へと相が変化することを我々は経験している。太陽の相では、気温が変化する。日輪が周期的な運動をしている

ものと仮定すると、気温にも周期的な変化が観察できるものと仮定できる。このような気温の太陽の相で、時間の観測には適さないものを著者は考える。この太陽の相では、太陽のエネルギーについて考察する情報を数十億年間の時間で考えることが仮定できる。周期的に変化する気温を参考に暦年のような時間の単位を定めることには利用できることもある。東の方位から日輪が昇る相には、地球上での東西南北の方位が変化しないことを仮定する。この仮定では、物理学的な変化は太陽が現在のように光を放ち観測できる。

月が夜見えるのは太陽の光を反射しているものと考えられる。このような月の光は、曇りの日や大気が汚染されていることで見えなくなってくる。昼に太陽の光が、大気が汚染されていても照らすのに対して月の光のほうが地上に到達しにくいことは明らかである。月の相は、大気が汚染されていることを知る際には太陽よりも我々にわかりやすく教えてくれるものと著者は日本の本州での経験から考える。月は地球の周りを衛星として回転運動している。この運動では、地球および月との万有引力を説明することになる。この万有引力で地球の水分の移動に影響を与える。月の光が見えるのは、日没頃であり、太陽の光が強く照らすときには月は見えない。月が見える時間帯に、大気中の水分が付着しやすくなる条件を得ることは経験で我々は知っている。太陽の光が強くなる照らす昼の日には、付着している水分は蒸発しやすくなる。水の移動で浄化され、日の光で闇が照らされ水で流された塵が光を放ち焼かれることを観察できる。月の光が照らすように気を浄化し、水で不浄なものを浄化し日の光で塵を焼くように有情・無情に太陽の精華を用いる。

太陽の熱で、地球上の気温が変化する。この温度変化は、土を作るのに必要なエネルギーを与えるもの仮定できる。このエネルギーは地球上の表面に分布する土の温度を変化させることができる。その土の温度差が地球の表面を取り巻く気体の温度に変化を生じさせる。地球の表面に分布している気体の温度差のエネルギーを生じさせることで、気体の圧力差を生じさせる。気体の圧力差で風が生じるものと仮定できる。この風で、気体の水分を持つ物質が移動して雲を作ることを仮定できる。この雲から雨が降るものと仮定できる。雲の水分が移動することで雲が消え虚空の中の不浄な物質が移動して虚空が浄化され、太陽の光が虚空を照らす。

無情の物質に熱が生じて、土が生じる。土から金を得て、金を用いて水を得る。その水が無情の生物を育てる。地球上に植物が生じているのは太陽の力であるものと仮定できる。この力は、万有引力の法則で説明するものも含むがエネルギー・回転運動で説明するものなども含む。著者の心のモデルでの力は、物理学の力のみではなく念力及び智力なども含む。植物が育つために、1日の変化が必要であり、四季の変化が必要にもなる。このような変化を弁別するのに、1日とする時間の単位を使用する。

3.3 妙なる法

正しい法に入ること智慧を与えられ心に妙なる法を具え持ち、身心を浄化して妙法の体となる。この体に妙法の蔵を秘するものと仮定する。妙法の蔵から眼目を得るものと仮定する。眼目を用いて読むのには、光を必要とする。地球上の我々は日の光を用いて昼に物を見る。夜には月の光を用いて物を見ることができる。灯火の光は、太陽の力で生じたものと仮定できる物で得ることが不可欠であるものと考えられる。智を得るのに因および縁を必要とするものと仮定する。我々が物を読み、物を知るのに時間を要することは経験している。

物を知って正しい法を弁別して智を得る。智の力は、心の浄化に用いることがある。正しい法の体から智を与えられるものと仮定する。その法の体は、智を妙法の蔵に秘するものと仮定する。我々の本は、その妙法の蔵を秘する体を無始から持つものとする。このことでは、体はすでに説明したようにひとつであるので、大本の体も我々の本の体も同じものを体とする仮定になることは自明である。

大本が智を与えることで、我々の本は属性を変更するものと仮定する。このことでは、物を知るのに我々が時間を要することから属性の変更に時間を要することがわかる。属性が決定することで体および性から相が決定するので、

その性は相が出来する世界の法に依じて変更されるものと仮定できる。我々が物を知るのに要する時間の因および縁は、大本に支配されているものと仮定する。妙法の蔵を密かに持つ無始無終の本の体に因・縁・果を有し、大本の支配で結ぶ順序が決定し本の属性を変更していくことを仮定できる。心に因・縁・果を用いて順序を仮定できても時間を仮定できない。この心の順序は相が出来する世界の時間に対応させることを仮定する。複数の世界に相が出来するのなら、各世界の時間にそれぞれ対応するものと仮定する。この心の因・縁は心の妙なる力で得るものと仮定する。このことでは、相・性・体は俱ともに心に具わり本の心と本から出来しているものはそれぞれ独立した存在としては説明していない。

本は、大本の決定で性が決まり大本と同じ妙法の蔵を具えている体を持つ。各本は、体が同じで大本に具わっているものと仮定する。本から出来するものが大本を認識しないことは我々自身で自明である。本が妙法の蔵と一体である体も具えていても、本から出来するものの体が同じ妙法の蔵と一体である体を持つものとは限らないものと仮定する。

妙法の蔵を得るには、力を作用させることで具えることができる。この力は、妙法の蔵を得ることができる因および縁を持つものが、その因から縁の助けで妙法の蔵を具えることができる力である。このことでは、この力を作用させる前に日の力から生じるものを用いるほうが2013年現在の地球上の環境下では自然であるものと仮定できる。妙法の蔵を具えるのには、善悪を弁えて善を守る性に具わる智を用いることを説明できる。善悪を弁えるのに我々は、智を用いることは自明である。善悪を弁えても善を守る性を持つものとは限らない。罪福を得るに、善悪を仮定することは普通である。悪人に罪を仮定し、善人に福を仮定することも語の意味では縁を見る関係である。妙法の蔵に罪福があることも仮定する。この仮定に、大本が具えるすべての本は闇を智で照らし正しい法を持つことで罪を減じて福を増やすものと仮定できる。福を増長させ浄化した体に妙法の蔵を具えるものと仮定する。このことから、妙法の蔵に罪福を収めていても、その蔵を具える本は浄化されている体を持つことになる。その蔵に収めている善悪を弁えて善を守る性に住することで智を得るものと仮定する。

正しいものと心に定め力の作用で、その蔵に収めている善悪を弁えて善を守る性に乱れずに住するものと仮定する。普通の言葉に収めると、信じる力で乱れずに住するものと言える。智を得て力を示し、さらに正しい法を得ていくことでさらに浄化されていき、妙法の蔵と一体となることを仮定する。より浄化された善を守る性で心に深く住するにつれて、妙法の蔵と一体になっていくことを仮定する。

無始無終に存在してただひとつの法である妙法の蔵に収めてある各性を各本の属性として、大本は各本を用いる。各本から出来するものは、大本に用いられることがある。大本に用いられることで、各本から出来するものが浄化されていき妙法の蔵と一体となり清浄な体となる。本の体が清浄であっても、その性が清浄であるものか大本に因り決定するものと仮定できる。その体の蔵には罪を持つ性も収められている。妙法の蔵は、完全に浄化された清浄な法——2013年現在では、妙法の一部であるものと仮定する。——であるものと仮定する。その妙法の蔵に大本も収められており、大本は無始無終に存在する各本に縁を持つものと仮定する。この仮定で、大本も無始無終に存在する必要がある。

本から出来したものに本として扱える心が生じるものと仮定できる。心でない現象には、その出来したもの相、性および体を仮定できる。このことで、心に本を仮定できる。

本に大本が生じているものと扱える場合を仮定する。この解釈では、大本が生じている本と大本は区別している。本および大本の体は等しく妙法の蔵を秘するものであり、性も大本として扱える性であるが大本の心は本の心とは異なるものであることを仮定する。

のり法に各本および大本が背くことはないことを2012年現在の文献3で仮定した。妙法を自身とする性を大本の性

——本も妙法を自身とする性を持つ。——と仮定する。大本の体が妙法を体とするものと仮定している。この意味では、大本は妙法が大本として振る舞うことで他の本を妙法の相に含めて妙法として無始無終で存在することになる。この仮定では、大本の性の決定で大本の体から各本の相が決定する。妙法を体として、妙法から各本が生じる——発するとも言える。——ものと解釈できる。大本に各本は支配されて各本の属性を決定される。各本は、決定された本の属性に従って妙法の体から生じる相を大本に用いられる。

究竟させることでは、妙法からすべてが生じるものと仮定する。このことは、心からすべてが生じることを論じているものではない。本から出来するものは、妙法から発するものと考えられることになる。各本が妙法から発することになる。妙法が無始無終で存在すること、妙法の蔵は無始無終で存在する。妙法の蔵に収められているものは、妙法から発するものと仮定する。心は、本から出来するものとして仮定するので妙法の蔵に収められているものとする。

本を観る際には、我々は心を観ることになる。本と本から出来するものをひとつとして用いるので、そのひとつのものに心は含められるものと仮定する。心に距離を仮定できないことでは、本から出来した心はひとつである。本から出来している複数なもの——相、性および体で記述できる。——にそれぞれの心を仮定することでも、その本の心はひとつである。

3.4 相

妙法の蔵に収められている相・性および体を出来させるものを仮定する。そのものを身と呼ぶことにする。身は妙法の蔵に収められている。身の相、身の性および身の体を仮定する。相・性および体でひとつである。そのひとつに相、性および体を出来させる身を仮定することで、その身は身の相、身の性および身の体でひとつの身として説明することになる。

妙法の蔵と一体となる浄化をされた体を身体と呼ぶことにする。妙法の蔵の中に住し正しい法を持つことで浄化していくように身体が働くことを仮定する。妙法を自身とする浄化をするように支配し身性が働くことを仮定する。正しい法で浄化していくように身性の支配に応じた相が身体から生じるように身相が働くことを仮定する。

本の身相を本身相と呼ぶことにする。本の身性を本身性と呼ぶことにする。本の身体を本身体と呼ぶことにする。本の身が身相、身性および身体を出来させることを仮定する。本の身を本身と呼ぶことにする。本身から出来するもので現象を説明できる。本身では、大本での本身性の支配で本身体が働くことに依って本身相が働くものと仮定できる。身相の働きで相が生じる。その相には性および体が用いられる。身相は本の相でもある。

大本が本の属性を決定することは、本身性の用いる智を決定するものと仮定する。そして、妙法自身となる本身性が智を用いて、本身体で妙法の蔵から出来させるものと仮定する。各本に共通して存在する基の部分が、大本に支配されている妙法自身と仮定する性である。この本の性とは別に、本の相に含まれる性を本の性と呼ぶことがある。

妙法の蔵に収められている相、性および体について、その蔵を大本が開いて世界の相、性および体を用いることになる。世界が因、縁および果で結ばれることでは、時間が無い心も結ぶことができる。大本の性では、妙法自身として相、性および体について用いる最勝の善を弁える智慧で各相を大本の相とし各相の性を大本の性で結び体を等しくするものと仮定する。

身は本身が生じさせているものと仮定できる。身性は、本身性に支配されて性を決定されるものと仮定できる。身体は、本身性に支配されている本身体が妙法の蔵から出来させるものと仮定できる。身相は、身性に支配されている身体が妙法の蔵から出来させるものと仮定できる。身相は本身相に含まれるものと仮定できる。相は、大本も本のこととも相、性および体で関係を考えるのに助けてきた。この関係——相、性および体の関係のこと。——が大本および本の相でもある。力、作、因、縁、果および報も同様であり、究竟して各本の相が大本の報となることも相である。このことでは、各本および本から出来するものは相に従っている。本身相は、他の本身相に影響を与えることがある

ので大本の相全体に多少とも影響を出来させることが仮定できる。

3.5 主の徳、師の徳および親の徳

より浄化された善を守るように相が生じて、性が大本の性のように妙法自身となるように支配していく。このことで、より正しい法を持ち妙法の蔵に一体となるように導かれる。このように働く場合の相は、その身に師の徳を示すものと仮定する。

師の徳でより正しい法を持ち妙法の蔵に一体となって、より浄化された体の妙法の蔵から相が生じる。この体を支配している性の智で、この体から相を生じさせる。この相を生んだのは、この体である。このことで、この体はこの相に対して親の徳を示すものと仮定する。

体を支配している性の智は、体から出来する相を決定する。性の支配は、その体を性がどのように受けてどのような相をどのように用いるかを決定することである。このような性は、主の徳を示すものと仮定する。性が体から相を出来させるのに、その体を浄化せずに用いる場合と体をより浄化して用いる場合に分けることができる。浄化されることでは、より妙法自身になるように浄化されるものと仮定する。妙法自身になっていくのには、その体で妙法の蔵の中に住する部分は、改善する必要を保証しないものと2013年現在は仮定する。

身体が親の徳を示す場合は、その身は親の徳を持つものと呼ぶことにする。身性が主の徳を示す場合は、その身は主の徳を持つものと呼ぶことにする。身相が師の徳を示す場合は、その身は師の徳を持つものと呼ぶことにする。その身は、その身から出来するもの——相、性および体で記述できるもの。——に主、師および親の徳を持つものと仮定する。それらの徳を身が持っていて、その身から出来するものに徳を示すかは決定しないものと仮定する。

身相では、身性は主の徳を示し身体は親の徳を示し身に師の徳を示すものと仮定できる。本身は、身に本身性で主の徳、本身体で親の徳および本身相で師の徳を示すものと仮定できる。大本は、本身に大本の性で主の徳、大本の体で親の徳および大本の相で師の徳を示すものと仮定できる。

2012年現在の文献3で、我々の心を個々に区別できることはすでに説明した。^{おのれ}己がどの身から出来させられるかは、他の身との因・縁で決定するものと仮定する。本の相は、その本には主の徳および師の徳を示さない身の相に用いられることを仮定できる。この相を出来させている本を支配している自身が主の徳を持ち支配している世界に、その相の性を仮定できる。その世界からその相の本に主の徳および師の徳を示さない自身の主の徳が支配している世界に出来できることを仮定できる。どちらの本身でも体は同じく妙法の蔵を秘するので、その蔵から等しい性および体を持つものの相を出来させることが考えられる。この場合で出来させられる相は、それぞれの世界で異なることも仮定できる。

性は心に仮定できる。この仮定では、自身が我々の心を妙法の蔵から出来させることを仮定できる。身の性は妙法自身となるように浄化することでは、大本の性が本身を用いた支配を身の性に強く及ぼしているものと仮定できる。身にまで浄化されていない相、性および体のひとつは、その性に強く支配されているものと仮定できる。このような相、性および体のひとつを憑系^{ひょうけい}と呼ぶことにする。我々の本身に主の徳、師の徳および親の徳を示さない本身の世界にも、我々の本身の憑系が出来するものと仮定できる。大本の性を正しいものと心に定め力の作用で、憑系を浄化していき本身あるいは身と呼べるものになり大本に用いられるものと仮定できる。

3.6 本身相に具する心

各本の体は等しく妙法の蔵を秘するので、主、師および親の徳を示す本の世界に妙法の蔵を通して各本の相を出来させることができる。これらの各本には、他の世界の主、師および親の徳を示す本が主の徳を持つものであると仮定する。自分に主の徳を持つ世界の本の力を作用させられると共に、出来する先の世界の主の徳を示す本の力、因および縁でその世界に出来するものとする。

妙法から発するには他の本との力、作、因、縁、果および報に依るものとする。各本から出来するものは身体をもつものとは保証されていない。このことでは、出来しているものの本を通して妙法の蔵から発することを行うものとする。

各本の基は等しくても、各本の因および縁で大本が各本の性を決定する。このことで、性が異なることを考えられる——属性でも説明している。—。この性での身あるいは憑系を出来させるものとする。自身が身を出来させ、身が憑系を出来させるものとする。本から心が出来ると、身および憑系には心を仮定できる。大本も本も妙法に収められている。本は大本の力で妙法を現すものと仮定する。本身は本の妙法の蔵から相、性および体を出来させる。大本が妙法自身とする性を持つことはすでに説明した。このことで、大本と妙法を区別した。この説明では、本は心とは異なるものと言える。このように考えると、大本は大本の心とは異なるものである。本は本の心とは異なることも同様である。

本から心が生じることは、本の妙法の蔵から妙用を作用させ不思議を心に生じることを言う。この不思議に依って我々の心は変わるものと仮定する。心は無始無終で存在することで、その心に生じる不思議は自身が生じさせるものと仮定する。このことで、心が本身相に含まれることは成立すると言えるだろう。本身相は本身性とは異なる。自身が心を本身相に具することは明らかである。本身相に具する心に身あるいは憑系を仮定できる。この意味では、身あるいは憑系の性に心を仮定できる。しかし、この議論では本身性に心を仮定するものではない。本身性が大本に支配されており、大本の性と等しい場合には心のように変わるものとは仮定できない。我々が自己の本から生じていると、心と俱に自己として無始無終の存在とするものが本である。

妙法から大本も発することはすでに触れた。大本は、縁を持った各本に主の徳、師の徳および親の徳を示すものと仮定する。この大本は縁を各本に持つものである。その縁で大本が各本に妙法からの徳を用いる。各本が無始無終で存在して、その各本が縁を持つ大本も無始無終で存在する。異なる大本に縁を持つ縁を仮定する。その縁で、その本の大本が他の大本に交代することを仮定する。各大本の主の徳、師の徳および親の徳を示す本身を仮定でき、その本身の世界で他の本が存在しているものと仮定した。各大本は各本との縁が異なるが、大本自身に要求される徳は妙法に収められて無始無終で存在するものとした。この意味では、各本が無始無終で存在することも妙法に収められている。妙法に無始無終で収められており、無始無終で存在するものと各本に考えた。大本および各本が無始無終で妙法に住し、妙法からの徳を受け用いることで各本から出来するものが生じるものと仮定できる。

妙法に住する智および妙法から受け用いる智を仮定できる。大本の妙法の蔵の智の光で、本身性が決定され本身体の妙法の蔵で本身を莊嚴に裝飾する。本身体が住している妙法の蔵の妙法の智の光で妙法を受け用いる。莊嚴に裝飾する本身体からの妙法の智の光は日および月を生じさせる。日の相、性および体から生じる力、作、因、縁、果および報は究竟すると大本から生じたものとなる。日および月が生死の因および縁となり、その因および縁は大本の体から生じることになる。地球上で存在するものが生死の報を受けるのに、日の光が縁となり力を作用させる。日の光の生滅は、妙法に収められており日月の存在する世界で生滅の時を定める。

4 あとがき

2章では、時間および距離が仮定できない領域を物理学の時空に関係付けた。物理学の座標系には、時間、距離およびエネルギーが具わっているものと仮定した。時空に物理学の座標系を仮定できることになる。このことで、時間および距離が存在する時空の全体にエネルギーが存在することを仮定している。この関係付けで両領域を統べる妙法を3章で仮定した。時空と心の関係について考えた。妙法と心を区別し、時間および距離が仮定できない領域に仮定した。著者の言葉で記述する心のモデルで大本および本を仮定した。大本および本で妙法から世界が出来するものと考えた。世界に我々が存在することで、我々の心および肉体が我々の各本から出来するものと考えた。我々の本が無始無終で妙法に収められ存在する。世界も妙法に収められている。心に有情および無情を考えた。人は有情の動物である。植物は無情の生物である。石は無情である。これら有情および無情の存在が本から出来していることを仮定した。心は本の相に生じることを考えた。著者の心のモデルでは、有情および無情は本の相に含むものと考えている。

時間および生死について日輪および月の相を観察して考察した。これらの相は日のエネルギーで生じる。生死の生滅も日の光のエネルギーで考えることができる。この生滅で時間を考えた。日のエネルギーで生じた光で、我々は物を読み智慧を得る。善の知恵で心を浄化できる。心の浄化で、さらに善を知る力を得る。最勝の善を弁える智慧で、世界に主の徳、師の徳および親の徳を示し最勝の善を保つように浄化するものと仮定した。日はエネルギーが無くなることで滅するものと考えることができる。妙法は無始無終で存在することで物理学の法則が支配する世界をも生じさせるものと仮定した。

2013年現在の著者の心のモデルでは、善悪についての導入の問題が多くあるものと著者は考えている。善を保ち、さらに大いなる善を保つようにする妙法を仮定する際に善悪をどのようにモデルに導入するべきかの問題を2013年現在の著者は考えている。

参考文献

- 1) [富岡和人, “理論物理学での波の関数1”](#)
- 2) [富岡和人, “理論物理学での波の関数2”](#)
- 3) [富岡和人, “理論物理学での波の関数3”](#)
- 4) [富岡和人, “特殊相対性理論の速度の変換”](#), pp.5-8, pp.32-38.
- 5) [富岡和人, “電位の簡単な入門2007第1回”](#), pp.9-14, pp.19-31.
- 6) [富岡和人, “特殊相対性理論のエネルギーの変換と相対論的質量の変換”](#), p.9, pp.14-17, pp.31-60, pp.102-103.
- 7) Vladimir A.Zorich, Roger Cooke(Translator), 2004: Mathematical Analysis I, Springer, pp.173-181.
- 8) ROBERT RESNICK, DAVID HALLIDAY, KENNETH S. KRANE, 1992: PHYSICS 4th Edition Volume1, John Wiley & Sons, Inc., pp.15-24.
- 9) [富岡和人, “AL_COM.CVSyst.1 on Dec. 27, 2006”](#), 循環系に関する研究報告, (2006-12-27)
- 10) [富岡和人, “AL_COM.CVSyst.2 on Dec. 25, 2008”](#), 循環系に関する研究報告, (2008-12-25)
- 11) [富岡和人, “循環系の回路モデルの簡単な初級講座2007第一回”](#)
- 12) [富岡和人, “循環系の回路モデルの簡単な初級講座2007第二回”](#)
- 13) [富岡和人, “循環系の回路モデルの簡単な初級講座2007第三回”](#)
- 14) [富岡和人, “電位の簡単な入門2007第2回”](#)
- 15) [富岡和人, “電位の簡単な入門2007第3回”](#)

- 1 6) [富岡和人, “電位の簡単な入門 2007 第4回”](#)
- 1 7) [富岡和人, “電位の簡単な入門 2007 第5回”](#)
- 1 8) [富岡和人, “電位の簡単な入門 2007Option”](#)
- 1 9) ROBERT RESNICK, 1968: INTRODUCTION TO SPECIAL RELATIVITY, John Wiley & Sons, Inc., pp.210-211.

免責事項

A LIFFE COM.および外部の情報提供者は、ユーザーに対しこの Web サイトの内容について何ら保証するものではありません。ユーザーが A LIFFE COM.の Web サイトを利用したことにより被った損失・損害、その他 A LIFFE COM. の Web サイトに関連して被った損失・損害について、A LIFFE COM. および外部の情報提供者は、一切責任を負いません。本資料は情報提供を目的として作成したものです。本資料の真偽に対しては、著者、A LIFE COM.および A LIFE COM.のバイオ研究室は一切の責任を負いません。

著作権

Copyright © 2013 富岡和人 All rights reserved.

文書のプロパティの文書に関する制限の概要の表示内容については著者の許可のないものとします。

本ドキュメントのバックアップのコピーは許可します。

本ドキュメントを私的利用の範囲内で印刷することは許可します。

理論物理学での波の関数 4 とみおかかずひと 富岡和人著

作成日：2013年12月31日

発行日：2013年12月31日

ホームページ

<http://www.alifecom.info/>

<http://book.geocities.jp/alifecominfo/>

<http://alifecominfo.aikotoba.jp/>

特殊相対性理論のページ

<http://www.alifecom.info/relativity.htm>

<http://book.geocities.jp/alifecominfo/relativity.htm>

<http://alifecominfo.aikotoba.jp/relativity.htm>

波のページ

<http://www.alifecom.info/theoryofwaves.htm>

<http://book.geocities.jp/alifecominfo/theoryofwaves.htm>

<http://alifecominfo.aikotoba.jp/theoryofwaves.htm>